

国際試合におけるインクルーシブスポーツの調査研究 —8th INAS World Half Marathon 大会の状況—

Research on Inclusive Sports in International Games
—From the 8th Inas World Half Marathon Championships—

井上明浩 (人間科学部スポーツ学科教授)

Akihiro INOUE (Faculty of Human Science, Department of Sport Science, Professor)

〈要旨〉

2018年第8回世界知的障害者ハーフマラソン選手権大会が、ポルトガルのコインブラで開催された。日本選手団は選手、役員、合計10名で臨み、見事団体戦金メダルを獲得し、個人戦でも銀メダル、銅メダルを獲得した。一方、知的障害者陸上競技の全国的な展開の幕開けは、1980年設立の日本スペシャルオリンピック、その後PWLによるFMHジャパンチャンピオンシップ競技会、それを土台に1996年に日本知的障害者陸上競技連盟が設立された。当該連盟設立以降、格段に環境が整ったと言える。今後、組織的な展開を図りながらさらなる競技人口の拡大や競技力向上が課題となろう。そのためには一般競技団体との統合化を実現することが必要であろう。それが実現すれば、飛躍的に知的障害者のみならず障害者全体の陸上競技の振興発展につながるであろう。つまりインクルーシブスポーツとして普及し、一般スポーツの一つのカテゴリーとして各競技団体と連携し、振興発展がなされる。我が国においてもそのようなスポーツ環境の整備を期待したい。

〈キーワード〉

インクルーシブ、知的障害者陸上競技、ハーフマラソン

1. はじめに

2018年10月19日から22日の4日間の日程で、第8回世界知的障害者ハーフマラソン選手権大会(8th Inas World Half Marathon Championships)がポルトガルのコインブラで開催された。この大会の主催者は、国際知的障害者スポーツ連盟⁽¹⁾(Inas: The International Federation for Athletes with Intellectual Impairments)であり、日本パラリンピック委員会⁽²⁾(JPC: Japan Paralympic Committee)及び、日本知的障害者陸上競技連盟⁽³⁾(JIDAF: Japan Intellectual Disability Athletics Federation)がその対応窓口である。この大会の選手選考にあたっては、JIDAFが現在国際大会派遣対象選手として強化指定選手を指定している選手、及び長距離選手で現在ハーフマラソン及びフルマラソンの日本記録を持つ選手1名をはじめ、今年1月東京で開催した第3回日本IDハーフマラソン選手権大会上位入賞者の中から選考した。また前回大会団体戦で銀メダルに輝いたことから、今回は初の金メダル獲得を目指し過去最高の布陣で臨もうとした。し

かしながらJIDAFの都合から、渡航費並びに参加費等の部分的個人負担を強いることから、選手本人並びにその選手の指導者そして保護者に出場の意向を尋ね、了承を得た選手を日本選手団として編成して参加した。結果的に今回は、選手7名、役員3名の計10名で編成され日本選手団として、同大会過去最高の参加人数となった。今大会は、世界9カ国からブラジル、日本、スペイン、イタリア、ポルトガル、ポーランド、オーストラリア、アメリカ合衆国



図1: 大会前日スタート付近各国選手団 (掲載承認済み以下同様)

(国別個人総合順位)の29人の選手が参加し、地元で開催されている約2,000人規模のハーフマラソン大会に併設されるインクルーシブスポーツの形で開催された。今大会で8回を数える世界知的障害者ハーフマラソン選手権大会であるが、第1回大会時、地元石川県の筆者自らが監督を務めるクラブチームから2選手と自身が団長となり初出場をした経験がある。筆者は、当該連盟の元選手強化副委員長、現理事長であり、長距離選手の育成に長く携わった経験がある。この間、国際パラリンピック委員会(IPC: International Paralympic Committee)が関与する競技スポーツの国際大会には、1992年マドリッドパラリンピック(スペイン・マドリッド)を皮切りに、コーチや監督、団長として数多くの国際大会を経験してきた。そしてこの度、日本選手団団長兼監督として参加の機会を得たので、その状況を報告する。

ところで、障害者スポーツにおいても、健常者スポーツ同様に各競技別に世界選手権大会が毎年世界中のどこかで盛んに行われている。しかしそれらはパラリンピックに比べると、国内ではまだまだその知名度や認識は薄いと言える。ましてや、知的障害者のハーフマラソン選手権大会などの情報は関係者周辺内で終始してしまう状況である。一方、今年8月に実施された日本ID(athletes with an intellectual disability: 知的障害者)陸上競技選手権大会は、今回で23回を数え、高い標準記録が設定されているにもかかわらず、過去の200名を超える選手が出場している⁽⁴⁾。JIDAFが設立され今年で22年を迎え、知的障害者スポーツにおける競技性の高い陸上競技が国内に浸透しつつある。今後その活動がどのように普及、発展していくか、現時点で展望したい。

2. 知的障害者陸上競技の国内外の潮流

2-1 スペシャルオリンピックスSOI(Special Olympics International)

知的障害者陸上競技の国際大会は、スペシャルオリンピックスインターナショナルが、1968年にアメリカ合衆国シカゴソルジャー競技場に、全米26州とカナダから約1,000人の選手により、水泳、フロアーホッケーと一緒に陸上競技が開催されたものが最初の競技会であろう⁽⁵⁾。スペシャルオリンピックスインターナショナルには、現在世界約170カ国が加盟している。同組織の理念は、知的発達障害のある人たちの成長にスポーツが大きなプラスになると信じ、またスポーツを通じて知的発達障害のある人たちと共に活動することは地域社会にとっても大きなプラスになるとしている。さらにスペシャルオリンピックスは性別、年齢、スポーツのレベルを問わず、共に成長し、共に楽しむ、そしてその経験を分かち合うことが重要と考える。

つまりSOIにとってスポーツは、知的障害者の社会参加やその理解のための、あくまで手段であるとも言える。そのため競技会は、すべての参加者が決勝へ進む形式をとっている。日常のトレーニングから示された記録をもとに、ほぼ同レベルの最大8名ないしは8チームの競技者が予選ラウンドに参加し、そこで出た競技成績でまた同レベルの競技者どうして決勝ラウンドが組まれる。よって全員が入賞し表彰を受けるのである。そのような競技会の方法をとるため、SOIでは、世界記録の保管や掲載、発表は一切していない。つまりは、オリンピック形式とはいうものの、一般的なチャンピオンシップスポーツの形態ではない。無論SOIの理念、そしてその理念に沿った活動内容自体が素晴らしく多くの人々が共感できたからこそ、現在でもその活動が世界的に広がり、継続されている。しかも1980年代になっても、パラリンピックにはまだ知的障害者が全く参加していなかった時代であり、国内でも同様に全国身体障害者スポーツ大会は実施されて、既に20年が経過していたにも関わらず、知的障害者にとってはそれに匹敵する全国規模の競技会が全くなかったのである。そのため知的障害者スポーツ界における国内チャンピオンや世界チャンピオンが全く存在しておらず、一般的な競技スポーツの機会はなかった。

2-2 アイナス Inas(2018年): The International Federation for Athletes with Intellectual Impairments (2015年当時) The International Federation for sport for para-athletes with an intellectual disability)

スペシャルオリンピックスが、アイナスに先んじて1968年アメリカ合衆国で設立され、国際的な知的障害者スポーツの振興を担っていたものの、1986年にINAS-FMH(The International Federation for sport for athletes with an Mental Handicap)が設立された⁽⁶⁾。その理由は、SOIの競技形式が通常の形の競技スポーツとは呼べない部分があるからではないであろうか。このような状況の中、ヨーロッパ諸国が中心となってアイナスが設立され、チャンピオンシップスポーツを日常的に展開することは、重度の障害のある人も含め、知的障害者スポーツの振興発展につながるとした同組織の理念は理解できる。今大会の主権者でこれまで知的障害者スポーツ界の国際的競技スポーツをリードしてきたアイナスの当時のINAS-FMHの理念は、ノーマライゼーションの原則がその基礎にある。これは知的障害のある人も社会の一員としてみんな同じ権利・機会・義務をもつということの意味する。同組織は、高齢者や幼児、目や耳が不自由な人、身体に障害のある人と同様に、何らかの支援を必要としているのである。スポーツの場面

においても、知的障害者は、自分の能力レベルに合わせて、地域・県・国・国際大会に、進んで参加する権利を有している、ということ掲げている⁽⁷⁾。

一方パラリンピックは、身体障害者スポーツの世界的祭典として1960年ローマ大会が第1回とされている。知的障害者が初めて参加したのは、1996年アトランタ大会である。その後1998年長野、2000年シドニー大会までの3大会に参加したが、シドニー大会での男子バスケットボール競技で金メダルを獲得したスペインチーム15名中、健常者が11名いたことが発覚し、その後IPCの裁定として、ID（現在II）クラス（知的障害者部門）選手の選手登録制度の再構築がなされるまで、パラリンピックへの道が閉ざされた。パラリンピックに知的障害者が出場できない状況下、その代替的意味合いを持つ大会としてInas が主催し4年に一度グローバルゲームを開催している。しかし最近になって、ようやくその問題が解決され、ロンドンパラリンピックからIDクラス競技の再開、つまり知的障害者がパラリンピックに出場できるようになった。

現在のInas加盟国⁽⁸⁾ 下線は新加盟、二重下線一時停止

○ヨーロッパリジョナル

オーストリア、ベルギー、クロアチア、キプロス、チェコ、デンマーク、エストニア、フェロー諸島、フィンランド、フランス、ドイツ、イギリス、ギリシャ、ハンガリー、アイスランド、イスラエル、イタリア、マルタ、ノルウェー、ポーランド、ポルトガル、ロシア、サンマリノ、スロベニア、スペイン、スウェーデン、スイス、オランダ、トルコ、ウクライナ

30カ国：ルーマニア脱退

○アメリカリジョナル

アルゼンチン、ブラジル、カナダ、チリ、コロンビア、ドミニカ、エクワドル、エルサルバドル、ガテマラ、ホンジュラス、メキシコ、ニカラグア、パナマ、ベルー、プエルトリコ、ベネゼイラ、アメリカ合衆国

17カ国

○アジアリジョナル

バーレーン、ブルネイ、中国、台湾、香港、インド、インドネシア、イラン、日本、クウェート、マカオ、マレーシア、カタール、サウジアラビア、シンガポール、韓国、タイ

17カ国

○オセアニアリジョナル

オーストラリア、ニュージーランド

2カ国

○アフリカリジョナル

カメルーン、カーボベルデ、中央アフリカ、チャド、エジプト、ギニア、マリ、リビア、コンゴ、モーリシャス、モロッコ、南アフリカ、チュニジア

13カ国

計79カ国：(2015) 68カ国

2-3 国内での知的障害者陸上競技と日本知的障がい者陸上競技連盟

2-3-1 日本知的障がい者陸上競技連盟設立経緯

1980年代の国内の知的障害者陸上競技の選手たちは、スペシャルオリンピック全国大会を目指して、日々の練習に励んでいた。それを支える組織としては、日本スペシャルオリンピック委員会並びに全日本手をつなぐ育成会であり、地方においては各都道府県の手をつなぐ育成会であった。1981年10月に、第1回日本スペシャルオリンピック全国大会を神奈川県藤沢市で開催し、その開催競技の1つとして陸上競技が実施された。その後この大会は、行政からの支援を受け、精神薄弱者スポーツ全国大会兼スペシャルオリンピック全国大会という並列名称で開催され、1991年に第7回大会を同名称にて大阪市で開催し、この大会を持ってスペシャルオリンピックの名称がなくなり、その後1992年、第1回全国精神薄弱者スポーツ大会ゆうあいピック東京大会が開催された。その後法令用語の改正に伴い、全国知的障害者スポーツ大会ゆうあいピックに改称され、次第に競技性が高まり、2000年の第9回大会ゆうあいピック岐阜大会まで開催された。そしてゆうあいピックは、2001年から開催された全国障害者スポーツ大会に統合され、発展的に解消した。しかしながら、これらの大会やその運営組織は、福祉という立場からスポーツを支えるという意味合いが強く、純粋に陸上競技の発展を目的とする団体とは言い難い。それは競技会形式が、先述した通り予選落ちということがなく、全員が決勝に進み、表彰を受けるものであるからである。

一方、1990年代に入ると、神奈川県横浜市中区に本部を置くPWLが、FMHジャパンチャンピオンシップ大会⁽⁹⁾を1996年から開催する。PWLとは「PLAY WORK LEARN」の略で、スポーツなど様々な活動を通して障害者の交流拡大、健康増進を進めていた。同法人は、障害者及び高齢者に対して、障害福祉サービスに関する事業や介護保険法に基づく居宅サービス等の事業を行い、地域社会づくりと保健、医療又は福祉の増進に寄与することを目的としていた⁽¹⁰⁾。

ところで、障害者スポーツ最高峰のパラリンピックに知的障害者が参加できるようになったのは、1996年のアトランタ大会からであり、日本選手団が参加したのは、2000

年のシドニー大会からである。一方、我が国においては、1998年の長野パラリンピックを契機として、障害者スポーツが、一般的な競技スポーツ同様に競技性が強調されるようになってきた。そのような潮流が、PWL主催のFMHジャパンチャンピオンシップに繋がっていったと考えられる。同大会は、スペシャルオリンピックやゆうあいピック、全国障害者スポーツ大会とは異なり、通常の陸上競技大会同様に予選、準決勝、決勝が行われる文字通りチャンピオンシップ大会であり、知的障害者スポーツ史上初めての本格的競技スポーツの幕開けとなったと言っても過言ではない。第1回大会は、1996年3月にスキー、4月にバスケットボール、8月に水泳、9月に陸上競技を開催した。陸上競技は、日本体育大学建志台陸上競技場に全国12都道府県及び政令指定都市から77名の選手が参加して行われた。FMHジャパンチャンピオンシップ陸上競技大会は、第3回大会まで継続され、それを引き継いだのが現在の日本知的障がい者陸上競技連盟である。

2-3-2 中央競技団体としての日本知的障がい者陸上競技連盟設立後の知的障害者陸上競技界の状況

当該連盟は千葉県に本部を置き、1996年11月に設立、2005年5月に特定非営利活動法人日本知的障害者陸上競技連盟（当時）として法人化された¹¹⁾。橋本聖子会長（文部科学副大臣歴任）を擁して、政財界からの支援を集め組織を固めていった。2018年に発展的に解消した日本知的障害者スポーツ連盟¹²⁾よりも設立は古く、その組織編成や国際大会への日本代表選手派遣を兼ねた日本ID陸上競技選手権大会の開催などその先駆的な取り組みは、他の中央競技団体の手本ともなった。2018年で第23回を迎えた同選手権大会は、年々各選手の競技力を向上させ、知的障害者陸上競技全般の振興発展に大きく貢献している。その他にも日本IDフルマラソン選手権大会、日本IDハーフマラソン選手権大会の開催、パラリンピックや世界選手権、グランプリレース等への日本選手団選考及び編成、派遣、育成・強化選手合宿実施等、格段に知的障害者陸上競技の環境が整ったと言える。なお日本IDフルマラソン選手権大会は、第1回大会より、Inas世界知的障害者ハーフマラソン選手権大会同様に、インクルーシブスポーツとして河口湖日刊スポーツマラソン（現：富士山マラソン）に、日本IDハーフマラソン選手権大会は、新宿シティハーフマラソン併設開催されている。

同連盟は、組織の拡充という面で、我が国の知的障害者のスポーツの牽引的な役割を果たしてきたと言える。しかし今後、国際的に活躍できる選手を継続的に排出していくためにはさらなる普及強化が課題となろう。それには現在の組織では限界がある。根本的な課題として次なるステー

ジは、インクルーシブスポーツとしての一般競技団体との統合を図ることであろう。欧米諸国を中心に国際的潮流として、一般中央競技団体が障害者スポーツを含んで普及強化振興を図っている。つまりその組織内の傘下に抱えている構図、健常者スポーツと障害者スポーツが統合化されているのである。今のところ日本国内の陸上競技界ではそのような動きはないが、そう遠くない将来にそれが実現することを願う。これにより、競技会運営役員やその他スタッフ、日常練習活動のための指導者不足等、慢性的な人員不足はかなり解決され、知的障害者のみならず障害者全体の陸上競技の振興発展につながることは自明のことであろう。障害者陸上競技が地域スポーツとして、あるいは総合型クラブという形態で発展し、一般スポーツの一つのカテゴリーとして認知向上し、普通に知的障害者陸上競技が行われている。我が国においてもそのような情景が浸透していくことを期待したい。

3. 大会の歴史と第8回 Inas 世界知的障害者ハーフマラソン選手権大会概要及び参加状況

過去大会の開催年及び場所

第1回大会	2006年	Châlons-en-Champagne	フランス
第2回大会	2008年	Reims	フランス
第3回大会	2010年	São Paulo	ブラジル
第4回大会	2013年	Ostrzeszów	ポーランド
第5回大会	2014年	Ostrzeszów	ポーランド
第6回大会	2015年	Douro Valley	ポルトガル
第7回大会	2016年	Evora	ポルトガル
第8回大会	2018年	Coimbra	ポルトガル



図2：スタート付近日本選手とInas主催者代表Joseと筆者

第8回大会は、2018年10月19日（金）から22日（月）ポルトガルのコインブラで開催された。男女別参加国は、男子上位国順にブラジル2名、日本7名、スペイン3名、イタリア1名、ポルトガル4名、ポーランド1名、オーストラリア3名、アメリカ合衆国2名、計8カ国、23名、女子上位国順にポーランド2名、ブラジル1名、オーストラリア3名

の計3名カ国、6名で、参加国数8カ国、参加選手数29名であった。参加国数は、世界選手権大会としては、多いとは言えないであろう。日本は第1回大会に出場したものの、それ以降の大会には出場せず、5大会9年ぶりに第6回大会から3回大会連続出場となった。初参加した第1回大会では入賞はしたものの、メダルには届かなかった。しかし今大会では、前回大会個人戦2位、団体戦銀メダルを獲得しており、今大会は悲願の金メダル獲得を目指しての参加であった。

同大会は、ポルトガルの首都リスボンから約200km、第2の都市ポルトから約120km離れたコインブラ州の州都コインブラ市で開催された。ポルトガルは、ヨーロッパ諸国の中で最も西に位置する。イベリア半島西端に位置し、国土は南北の長方形をしている。国土は約9万2千km²（日本の約1/4倍）に約1,000万人の人口であり、開催地となったコインブラは、人口約15万人の豊かな自然に囲まれている。ヨーロッパで最も古い大学のひとつであるコインブラ大学が1290年に設立されたことによって、ポルトガルの文化的中心地に発展した。

ポルトガルで開催された理由を考えると、まずはInas陸上競技委員会委員長であるJose氏の母国であること。そして彼の関係者やポルトガル陸上競技連盟の協力により、EDP Running Wondersランニングサーキット¹³⁾であるポルトガル国内5大会の1つに併設されているコインブラ大会は、約2,000人規模の参加者で開催されている¹⁴⁾。そのため競技運営には、Inas側がさほどの大きな労力を必要としないことが挙げられる。

付言すると、ポルトガルは、リオパラリンピックではメダル獲得数が73位であり、日本が64位であることから比較すれば、さほど障害者トップスポーツにあまり力を注いでいないようにも受け取られる。しかしながら、知的障害者陸上競技においては、圧倒的な強さを誇っている。日本の世界記録保持者はフルマラソンの1名のみであるが、ポルトガルは男女合わせて11種目の世界記録を持っている。特に競歩競技においては、男子の5,000mW、10,000mW、20kmW、50kmW、女子の10kmWにおいて、世界記録保持者を輩出している。

次に、輸送や選手村、参加費に関して述べる。輸送は、ポルトガル第1の国際空港であるリスボン空港に到着後、専任のスタッフが出迎え、選手村、大会会場の往復、大会終了後、リスボン空港見送りまですべてが参加費に含まれている。また選手村は、大会会場まで徒歩15分ほどに位置する市街地にあるホテルがあてられた。大会開催期間3泊4日の宿泊、全食事、大会参加料、輸送が含まれて、参加費は1人当たり200ユーロであった。

そして大会の内容であるが、10月19日(金)に選手団が現

地入りし、20日(土)は会場下見、練習日、監督会議、21日(日)は開会式その後競技会、表彰式、22日(月)は選手団帰国という日程であった。今大会は、日本選手団は選手7名、コーチ2名、団長兼監督1名で編成され、団体戦1位、個人戦2位、3位、4位、6位、9位、10位、14位の成績を残し、日本知的障害者陸上競技界のハーフマラソン世界選手権大会で初の金メダルを獲得するに至った。



図3：団体戦金メダル日本選手団（中央）

4. まとめ

2018年10月19日から22日の4日間の日程で、第8回世界知的障害者ハーフマラソン選手権大会が、ポルトガルのコインブラで開催された。この大会に日本選手団が参加したのは、第1回大会以来5大会9年ぶりから、第6回大会、第7回大会、第8回の3大会連続出場となった。今回の日本選手団は選手7名、団長兼監督1名、コーチ2名の合計10名で臨み、見事団体戦金メダルを獲得し、個人戦でも銀メダル、銅メダルを獲得した。

一方、知的障害者陸上競技の全国的な展開の幕開けは、1980年の日本スペシャルオリンピック委員会設立である。当時の陸上競技の選手たちは、スペシャルオリンピック全国大会を目指して、日々の練習に励んでいた。それを支える組織としては、JSOC並びに全日本手をつなぐ育成会であり、地方においては各都道府県の手をつなぐ育成会であった。しかしこれらの組織は、本来福祉団体であり、純粋に陸上競技の発展を目的とする団体ではない。そのような状況の中、PWLによるFMHジャパンチャンピオンシップ競技会が誕生し、それを土台に1996年に日本知的障害者陸上競技連盟が設立された。当該連盟設立以降、日本ID陸上競技選手権大会並びに日本IDフルマラソン選手権大会、日本IDハーフマラソン選手権大会の開催、そして日本選抜選手強化合宿実施等の選手育成等々、格段にそのスポーツ環境が整ったと言える。

しかしながら欧州に比べると、日本はまだ遅れていると言わざるを得ないであろう。今後、国際的に活躍できる選手を継続的に排出していくためには、組織的な展開を図りながら普及強化する。つまりさらなる競技人口の拡大や競

技力向上が課題となろう。そのためには一般競技団体との統合化を実現することが必要であろう。日本陸上競技連盟の傘下に加盟することが望まれる。これが実現すれば、飛躍的に知的障害者のみならず障害者全体の陸上競技の振興発展につながるであろう。今後、インクルーシブスポーツ

として普及し、つまり一般スポーツの一つのカテゴリーとして各競技団体と連携し、振興発展がなされる。我が国においても今後そのようなスポーツ環境の整備を期待したい。

注及び参考文献

- (1) 国際知的障害者スポーツ連盟は、国際パラリンピック委員会を構成する一団体である。知的障害者スポーツの国際組織は、スペシャルオリンピックスインターナショナルが1968年に設立したが、当該連盟は、設立当初からスペシャルオリンピックスの理念とは全く異なり、競技性の高い所謂エリートスポーツを志向した純粋なるスポーツ団体として、パラリンピック委員会の前身である国際調整委員会の1団体として、1986年にオランダで発足した。当初は、ヨーロッパ諸国を中心に14か国で発足したが、現在は全世界に広がり約70の国が加盟している。
- (2) 日本パラリンピック委員会 (JPC: Japan Paralympic Committee) は、国際パラリンピック委員会 (IPC: International Paralympic Committee) に加盟する国内を代表する機関。日本パラリンピック委員会は、当時の財団法人日本障害者スポーツ協会の内部組織として、1999年8月20日厚生省の認可を受け発足した。
- (3) 日本知的障がい者陸上競技連盟 (JAAID: Japan Athletic Association for people with an Intellectual Disabilities) は、1999年に設立され、2005年に非営利活動法人の法人格を取得して、英語表記を Japan Intellectual Disability Athletics Federations へ変更した。
日本知的障がい者陸上競技連盟 (2016) 組織概要案内リーフレット。
- (4) 日本知的障がい者陸上競技連盟 (2018) 2018日本ID陸上大会プログラム。
- (5) SOI (online) History 1968 Games. 1968Games. <https://www.specialolympics.org/about/history/1968-games> (情報取得2018/12/19)。
- (6) Inas (online) History of Inas. <https://inas.org/about-us/who-we-are/history-of-inas> (情報取得2018/12/19)。
- (7) INAS FID 「The INAS Handbook」 2010年。
- (8) アイナス <http://www.inas.org/about-us/who-we-are-2/member-organisations/> (情報取得2015/7/15)。
- (9) FMHジャパンチャンピオンシップ大会は、当時の国際精神薄弱者スポーツ協会 INAS-FMH (The International Federation for sport for athletes with an Mental Handicap) と協力関係ももちながら、全日本手をつなぐ育成会松友了常務理事とPWL代表箕輪一美氏が中心となり、通常の本選手権大会と同様な形式をとる知的障害者スポーツにおける国内初の競技会である。
- (10) 内閣府 (online) NPO法人ポータルサイト特定非営利活動法人 PWL (情報取得2018/12/18)。
- (11) 日本財団パラリンピックサポートセンター (2017) パラ陸上競技公式ガイド: よくわかるパラ陸上競技の世界。一般社団法人日本パラ陸上競技連盟, 認定特定非営利活動法人日本ブラインドマラソン協会, 特定非営利活動法人日本知的障がい者陸上競技連盟。
- (12) 特定非営利活動法人日本知的障がい者スポーツ連盟は、年に設立され、2018年3月に発展的解散に至り、同年4月から一般社団法人全日本知的障がい者スポーツ協会となっている。
- (13) ランニングワンダーシリーズは、ブルとがる国内のユネスコ世界遺産に登録されている都市をめぐるランニングシリーズ大会であり、その趣旨は、活発で健康的なライフスタイルの実践において彼を取り囲み、定義する環境と文化と人間の持続可能な統合を目指すこととされている。
- (14) EDP RUNNING WONDERS (online) Regulamento. <https://www.runningwonders.com/>. (情報取得2018/12/18)。